

謝罪行動を規定する文化的要因の分析

○熊井優日¹・橋本博文²

(¹ 安田女子大学心理学部心理学科・² 安田女子大学心理学部ビジネス心理学科)

目的

従来の比較文化的研究において、日本人の謝罪傾向は、集団主義文化と関連づけて議論されてきた。たとえば大淵（1999）は、日本人は人間関係を優先した判断を行うため、個人主義文化を生きる欧米人とは謝罪に対する志向性が異なる可能性を指摘している。実際に、吉田ら（1990）によって、日本人はアメリカ人であれば謝罪しないような状況においても謝罪をすること、また、謝罪することが適当だと判断される状況が日本人の場合極めて広範にわたることなどが明らかにされている。本研究の目的は、従来の文化間を比較する研究の知見を踏まえつつ、文化内の比較を行う——すなわち、個々人の文化的自己観を測定し、それが謝罪や赦し傾向に（どのような）影響を与えるのかを分析する——かたちで、謝罪行動を規定する文化的要因を検討することにある。

方法

調査対象者 安田女子大学の学生 222 名。

質問項目 謝罪と赦しを一連のプロセスとして捉える大坪ら（2014）の議論に基づき、個々人の謝罪傾向と赦し傾向を測るための尺度（Ohtsubo, Yamanura & Yagi, 2015）を質問紙に含めた（謝罪は 8 項目、赦しは 10 項目）。また個々人の文化的自己観（排除回避、自己主張、調和追求）を測るための尺度 15 項目（Hashimoto & Yamagishi, 2016）や自尊心を測る尺度 10 項目（山本・松井・山成, 1982）も用いた。上記の質問項目については、全て 7 件法で尋ねた。

結果

謝罪傾向と赦し傾向に影響を及ぼす文化的要因を明らかにするために、目的変数を謝罪得点ないし赦し得点、説明変数を三種類の文化的自己観（排除回避、自己主張、調和追求）とする重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、調和追求は謝罪、赦し得点とともに高める一方で、排除回避と自己主張は赦し得点を低めることが明らかになった。それぞれの重回帰分析の回帰係数、標準誤差、決定係数は Table 1, Table 2 に示すとおりである。

Table 1 謝罪得点を目的変数とする重回帰分析

	謝罪得点($\alpha=.83$)		
	B	SE B	β
排除回避	-.09	.06	-.11
自己主張	-.06	.05	-.07
調和追求	.47	.07	.43**
R^2			.17**

Table 2 赦し得点を目的変数とする重回帰分析

	赦し得点($\alpha=.62$)		
	B	SE B	β
排除回避	-.27	.05	-.35**
自己主張	-.26	.04	-.35**
調和追求	.41	.07	.39**
R^2			.26**

考察

調和追求が謝罪傾向と赦し傾向に対して正の効果を持つ一方で、排除回避と自己主張は赦し傾向に対して負の効果を持つことが示された。これらの結果から、日本人の謝罪行動に影響を与えるのは調和追求傾向であることが示唆される。しかし、調和追求の程度それ自体には、日米差が示されない（それどころか日本人はアメリカ人よりも調和追求尺度の得点が低い）ことが明らかにされている（Hashimoto & Yamagishi, 2013; 2016）。すなわち、調和追求によって日本人の謝罪行動を説明しようとするならば、謝罪のしやすさを日本人の特徴として議論するのは難しいと言えるかもしれない。興味深いのは、排除回避の程度と赦し傾向の関係である。排除回避傾向は先行研究において日本人に顕著であることが示されているため、日本人はむしろ他人を赦しにくく、また謝りにくい人たちであると解釈することもできるだろう。本研究ではあくまで日本人のみを対象とした文化内の比較調査であるため、今後文化的自己観と謝罪、赦し傾向の関係を文化間比較も併せて検討する必要があるだろう。